



平成31年に「田沼意次侯生誕300年」を迎えます。市の偉人であり、歴史上の人物として知名度の高い、田沼意次侯の生い立ちや事績などを紹介します。  
問い合わせ 社会教育課 長谷川 ☎0532646

# 田沼意次侯

## 生誕300年まで あとわずか

### 田沼意次侯の誕生

田沼意次侯は享保4（1719）年、田沼意行（もとゆき／おきゆき）の長男として江戸で生まれました。幼名を龍助としました。父の意行は元紀伊藩士で、徳川吉宗が部屋住みだったころから側に仕えた人物です。吉宗が8代将軍に就任したため、江戸に出て、将軍の小姓（主君に近侍し、身辺の雑用をたす武士）、知行（幕府や藩が家臣に支給した土地）600石の旗本（武士の身分）に取り立てられました。享保19（1734）年、17歳のとき、龍助は、世継ぎである徳川家重の小姓に登用されました。また、同年に父の意行が亡くなったため、翌20（1735）年に知行600石を相続し、元服して意次と名乗りました。

### 9代将軍徳川家重の重用と郡上騒動での手腕

意次侯が飛躍したきっかけは、延享2（1745）年、徳川家重が9代将軍に就任したことです。延享4（1747）年、意次侯は御用取次（将軍居室と

御用部屋との間を取り次ぎする役）見習いに任じられます。この役職は将軍の側において、要職との仲介や政策・人事の立案、情報の収集などを行う非常に重要な役目でした。さらに、意次侯の力量を知らしめたのが、美濃郡上一揆（岐阜県郡上市）への対応でした。この一揆は、年貢の増徴を図る郡上藩と、それに反発した領民との間に起きた騒動です。

事件に対して、意次侯は、老中などと一緒に評定所（幕府の最高裁判機関）に出席。領民への敵罰だけでなく、金森頼錦（藩主）の改易（身分の剥奪や所領などの没収）、頼錦に協力した本多正珍（老中）や本多忠央（若年寄）の罷免（職務をやめさせる）など、藩側幕府側の責任も認める厳しい処置を下しました。これにより意次侯は、優れた政治的・行政的能力の持ち主と認められ、田沼時代への一歩を踏み出したと考えられています。

### 幕政改革への挑戦 田沼時代

宝暦8（1758）年、40歳のとき、郡上一揆の対応を

と発展したからです。

幕府財政を再建するために、それ以外の方策が求められ、意次侯は成長著しかった民間の力と知恵に注目し、税制や貨幣を改革したり、産業を振興したりしました。その結果、幕府財政は改善し、天明の大飢饉が起きるまでは良好な状態が続きました。また、もう一つの成果として、宝暦・天明文化といわれ

る文化が発展しました。

意次侯の政策は、斬新でユニークなものが多く、民間の経済活動を大いに刺激しました。そのため、自由な気風が世間に生まれ、芸術や学問、思想などの世界で新しい発想が次々と生み出されました。代表的な人物には伊藤若冲や円山応挙、鈴木春信、与謝蕪村、杉田玄白、本居宣長などがいます。



狩野典信筆「伝田沼意次侯領内遠望図」（個人蔵）：意次侯が領地を巡視したときの様子が描かれている

## 田沼意次侯の改革

### その1 税制の改革

新たな税収源として、民間の商人から税金を徴収しました。これを「運上・冥加金」といいます。ただし、そのままでは反発が予想されるため、「株仲間」（同業者組合）を公認して営業上の権利を認め、その見返りに納入させました。

### その2 産業の振興

日本から金銀が流出することを防ぐため、外国から輸入していた砂糖や朝鮮人参を国産化しました。また、金銀に代わる輸出品として、銅や俵物（いりなまこ・ほしあわび・ふかひれ）を増産し、外貨の獲得にも力を注ぎました。これらの事業は、由村藍水や平賀源内など、民間の人材と協力して進められました。

### その3 貨幣の改革

江戸時代の貨幣は、金貨・銀貨・銭貨の三貨で成り立っていました。ただし、計数貨幣（一定の額が表示された貨幣）の金貨・銭貨と違い、銀貨は、重さで額を決める秤量貨幣でした。そのため、使用のたびに重さを量らなければならず、取り扱いが不便でした。問題は、もう一つありました。江戸では金貨で取引したのに対して、大坂では銀貨で取引しました。しかも、為替レートが常に変動していたため、両替するのも一苦労でした。これらの問題を解決するため、意次侯は、明和9（1772）年に南鐮二朱銀という新しい銀貨を発行しました。この銀貨には、「この銀貨八枚で小判一枚と交換できる」と表示されていました。つまり、前もってレートを決めておくことで、重さや両替の手間を省いたのです。南鐮二朱銀の登場は、商売を円滑にし、経済の活性化につながりました。



南鐮二朱銀（左が表・右が裏）



現在の岐阜県郡上市「郡上八幡の町並み」と「郡上八幡城」



相良城杉戸 (般若寺所蔵)

陣太鼓 (般若寺所蔵):意次侯が相良城築造を命ぜられた際に、江戸の「お太鼓師」に作らせた秘蔵の太鼓 (相良に海賊が襲来したとき、この陣太鼓を打ち鳴らし撃退したという)



大澤寺本堂:寛政3 (1791)年に建築 (相良城の木材を使用し建てられたという)



平田寺本堂:天明6 (1786)年、意次侯の寄進により再建

改善した幕府財政を悪化させました。この頃の意次侯は、大規模な開発事業を進めていました。印旛沼 (千葉県の利根川水系の沼)の干拓と蝦夷地 (北海道)の開発です。印旛沼の干拓は、享保の改革のときから試みられた事業で、意次侯はそれを引き継ぎ、約3400町歩 (約3400ヘクタール)もの新田開発を計画しました。また、印旛沼の水を江戸湾に落とすため、地面を掘って水路をつくり、水害の防止や水運の開発を図ることも目的としました。事業は、天明2 (1782)年から始まりました。蝦夷地の開発は、日本の歴史上、初めて具体化された北海道開発構想です。ロシアとの交易や釧山の開発、海産物の増産などを目的とし、天明5 (1758)年には、調査団が派遣されました。ところが、印旛沼の干拓は、天明6 (1786)年に発生した大洪水により、利根川の水が入り込んで失敗。蝦夷地の開発は、現地調査の結果、従来の長崎貿易に支障が出るとして、計画の見直しに迫られました。当時の知識や技術、労働力では、非常に困

難が伴ったのです。飢饉により庶民の不満が高まるなか、莫大な資金を投入したこれらの事業の失敗は、意次侯へ責任を求める声を強くしました。田沼時代の最後 天明4 (1784)年、嫡男 (跡取り)の意知が、江戸城内で佐野善左衛門に斬り付けられ、その傷がもとで亡くなりました。さらに、2年後の天明6 (1786)年、最大の理解者だった10代将軍の家治が、この世を去りました。これによって、意次侯の失脚は決定的となりました。同年、意次侯は老中を辞職し、謹慎を命じられます。処分はこれで終わらず、天明7 (1787)年、最大で5万7千石を誇った所領は没収され、相良城も取り壊しが決まりました。家督は、孫の意明が相続しましたが、陸奥下村藩 (福島県福島市)へと転封されてしまいました。天明8 (1788)年、田沼意次侯は享年70歳で、その波乱の生涯を閉じました。東京都豊島区駒込の勝林寺に葬られました。



大江八幡宮の廻船絵馬 (大江八幡宮所蔵):意次侯の藩主時代に奉納された絵馬で、多くの船が来航したことがわかる

郷土の偉人 相良藩主 田沼意次侯 では、相良藩主としては、どのような事績を残したのでしょうか。宝暦8 (1758)年、遠江相良1万石の大名になった意次侯は、翌年の宝暦9年 (1759)年、養蚕や桑、

はぜの木などの栽培を奨励。これらを作れば江戸や大坂より商人が来訪し、百姓の助けになると効用を説きました。明和4 (1767)年、相良城の築城を許された意次侯は、翌5年から工事を開始し、同時に城下町の建設を進めました。それは、郷土を大きく作り変えるような内容でした。



国指定重要無形民俗文化財「大江八幡宮の御船神事」:江戸時代、相良湊の廻船問屋が海上安全や商売繁盛を祈願したのが起源

まず、土地を買収して家々を引越させ、町割りによって街路や区画

を整理。次に、それまで船で渡っていた萩間川に湊橋を架け、この橋を起点にして、相良湊と川崎湊、藤枝宿を結ぶ田沼街道をつくりました。さらに景観や防災対策として、町家の屋根を葺き替えて板や瓦に葺き替えさせました。治水事業も行われ、元来2つに分かれていた萩間川は、この頃に現在のような流れに変わったといわれています。これには、水深や川幅を広げて、停泊できる船を増やす意味もありました。

こうして、交通や流通の便が整備されたことで、郷土はますます発展しました。川崎湊や相良湊には、千石船をはじめ、たくさんの船が来航したといわれています。安永9 (1780)年、意次侯は、完成した相良城を見分するため、相良にお国入りしました。そして、そのでき映えを賞賛し、采配を振るった井上伊織に、未代まで知行と家老職を安堵する書状を出しました。

### 大飢饉と事業の失敗

これまで見てきたように、意次侯は、斬新でユニークな政策を次々と実行しました。しかし、晩年は不運が重なり、失敗に終わったものも多くありました。天明3 (1783)年、意次侯の政權を揺るがす事件が起こります。浅間山が大噴火したのです。東北地方では、前年から異常気象に見舞われていましたが、これにより東北や北関東で降灰や冷害が発生し、大飢饉に陥りました。餓死者は、数10万人に及ぶと考えられています。江戸時代最大の飢饉といわれる天明の大飢饉の発生は、